

岩田真美・桐原健真編

『カミとホトケの幕末維新』

——交錯する宗教世界——

法蔵館 二〇一八年二月刊
A5判 iv+三八三頁 二〇〇〇円+税

西田 彰 一

本書は「幕末維新期」という時代を、近世と近代とを分断する転換点としてではなく、むしろ両者を架橋する結節点として、文化史とりわけ思想や宗教といった側面から描き出すことを目的とし（三頁）、幕末維新期の宗教、あるいは当該期の宗教研究に関する三部二章の充実した（コラムも含めれば二二名の研究者の）論考が収録された本である。本書は、二〇一〇年に組織された「幕末維新期護法思想史研究会」や、その後の科研「幕末維新期護法論の思想的・研究」および「近代移行期における日本仏教と教化」における実に八年近くにもおよぶ共同研究の成果を著わしたものであり、また、幕末維新期の宗教及び宗教研究に関する入門書としても位置付けられている。内容が多岐にわたるので、まずは本書の構成と各章のごく短い紹介をしつつ、評者が考える本書の評価すべき点と気になった点を示していくこととする。

構成は次のとおりである。

コラム 幕末京都の政治都市化と寺院

高橋秀慧

第Ⅲ部 カミとホトケにおける「維新」の射程

幕末維新期のキリスト教という「困難」

星野靖二

コラム 幕末維新のキリスト教伝道

落合建仁

幕末／明治前期の仏書出版

引野亨輔

コラム 絶対的創造神への批判

松田淳一

——釈雲照のキリスト教観①

仏教天文学を学ぶ人のために——佐田介石と

谷川 穰

コラム 天主とは何者か

——釈雲照のキリスト教観②

松田淳一

社寺領上知令の影響——「境内」の明治維新——

林 淳

コラム 明治は遠くなりにけり

大谷栄一

——明治仏教史編纂所のこと

あとがき

執筆者紹介

岩田真美

第Ⅰ部には、幕末維新期の宗教研究の従来の研究史を俯瞰し

つつ、その枠組みを相対化し、新たな可能性を論じる研究が集

められている。

上野論文は、神仏分離の先行研究をまとめ、神仏分離の研究

が仏教史で盛んに取り上げられ、それが「廃仏毀釈」による法

難史観と密接に結びついていたことを指摘する。しかし実際に

は、神仏分離の法令と研究者の論述との間にはズレがあり、し

かも近世においては神道の自立化が進みつつも、神仏の非分離

はじめに

コラム 明治百年と一九六八年の宗教界

桐原健真

第Ⅰ部 維新とカミとホトケの語り

大澤広嗣

神仏分離研究の視角をめぐって

上野大輔

コラム 孔子の変貌——儒学と明治日本

桐原健真

日本宗教史学における廃仏毀釈の位相

オリオン・クラウタウ

コラム 廃仏毀釈と文化財

碧海寿広

「世直し」の再考察——宗教史的観点から——

三浦隆司

コラム 宗門檀那請合之掟

朴澤直秀

「民衆宗教」は誰を語るのか

青野 誠

——「民衆宗教」概念の形成と変容——

青野 誠

コラム 維新は迎えられずとも

青野 誠

——鳥伝神道の断絶と「民衆」

青野 誠

第Ⅱ部 新たな視座からみた「維新」

青野 誠

幕末護法論と儒学ネットワーク

岩田真美

——真宗僧月性を中心に——

高橋秀慧

コラム 勤王・護法の実践——真言宗の勤王僧

高橋秀慧

排耶と攘夷

高橋秀慧

——幕末宗教思想における後期水戸学の位相——

桐原健真

コラム 京坂「切支丹」一件

松金直美

維新前後の日蓮宗にみる国家と法華経

ジャクリン・ストーン

——小川泰堂を中心に——

芹口真結子

コラム 仏教教導職の教化活動

芹口真結子

明治維新にみる伊勢神宮

ジョン・ブリン

——空間的変貌の過程——

ジョン・ブリン

の状況も少なからず存在しているので、地域差や宗派の差異にも気を付けなければならないと説く。そのため仏教の法難史観を相対化し、諸主体の様々な要素を詳細に検討することを通して、幕末維新期の宗教世界を描かなければならないと主張する。

クラウタウ論文は、「廃仏毀釈」の実態に迫るというよりも、そのイメージがどのようにして成立したのかのプロセスに焦点を当てている。そして、一九一〇年代の『仏教史学』特集号から、一九二六年の『明治維新神仏分離史料』を経て、一九三〇年代のマルクス主義歴史学の影響下で、近世の僧侶の墮落の結果、維新政府に弾圧を招き、その結果目覚める仏教という自己意識が形成され、近代仏教のアイデンティティを形成したと指摘している。

三浦論文は、従来の「世直し」研究が、百姓一揆の実行者たちに革命の主体を見出そうとしたがために、学術用語としての「世直し」と、資料用語としてのそれを混合して使用している」と指摘する。そこで、資料用語としての「世直し」「世直し神」と注目して、江戸時代中期から後期にかけて登場したこれらの用語や神格を、幕末の宗教世界や文化に位置づける。そのうえで、当時の人々が「世直し」に対して厄除けや縁起直しのように多様な意味づけを行っていたことや、「世直し神」に仮託して一揆をおこすものの、社会体制の抜本的な変革を目指さず、既存の秩序の中での世直しを求めていたことを明らかにしている。

青野論文は、「民衆宗教」という概念の形成と変遷について、

村上重良や安丸良夫の研究をはじめとした諸研究から明らかにしている。そして、村上の「民衆宗教」という概念は、研究当時の政治と宗教の接近に対する強い危機感の中から作られた概念であり、安丸は村上の「民衆宗教」の限界を指摘しつつも、そこには国家権力の統制に対抗し得る主体形成の可能性があると論じ、「民衆宗教」が七〇年代以降の研究者の強い問題意識に影響された概念であることを指摘している。

第Ⅱ部では、幕末維新期の文化史が中心的テーマとされ、近代化論を前提とする従来の見方を批判し、文化史的状况として幕末維新期は明治以降の時代に強く影響を与えているということとを指摘する論文やコラムが収録されている。

岩田論文は、排仏論に対抗した仏教者の議論である護法論を取り上げ、とくに「護法・護国・防邪の一体論」を説いた僧侶月性の護法論に着目している。そのうえで月性は護法論を説いたけれども、その護法論は排仏論への対抗というよりも、儒者たちとの同志的ネットワークを通して形成されたと主張する。また同時に、月性が護国・攘夷の立場から、西本願寺教団に護国のための仏教による民衆教化に期待していた点を明らかにし、明治維新後の西本願寺の動向に影響を与えていたと述べている。

桐原論文は、後期水戸学における排耶論の具体的内容を明らかにしたものである。水戸学における原理的な尊王攘夷論の内実は、じつはキリシタン禁制と鎖国を「祖法」とみなす排耶論であったことを指摘する。そして、水戸学においては現実に西洋列強に対抗できないことが判明するにしたがって、水戸学者

第Ⅲ部では、維新以降における宗教世界の実像が主題とされ、当該期のキリスト教や仏教の研究を中心に、文明開化による一元的な西洋化を相対化し、その多様な反応を実態に即して論じる論文及びコラムが収められている。

星野論文は、幕末維新期のキリスト教に注目し、そこには、実態としてのキリスト教と表象としてのキリスト教の二つがある、と指摘している。とくに後者の表象としてのキリスト教は、近世以来の邪教観を含みながらかたちづくられたものであるため、実際は流行り神の延長線上にあるような信仰が「切支丹」とされた、京坂「切支丹」一件のように、実態としてのキリスト教と直接関係を持たない表象も多い。幕末維新期におけるキリスト教の実態と表象の隔たりと相互の影響関係は、研究を整理する際に重要な論点となり得るので、この点を意識しつつ、従来の諸研究領域を横断するような俯瞰的な視座が必要ではないかと星野は提言している。

引野論文は、幕末から明治にかけての仏教書の出版事業とその変遷を取り上げている。江戸時代の本版印刷は、仏教の各派宗門や茶道・華道の権威と結びつくことで長くその技術を保ち続けた。しかし明治前期になると、東京で創業した仏教系新興出版社は、活版印刷を積極的に取り入れ、従来の宗門系の本版印刷を圧倒していくようになる。その一方で、京都は読経用の經典などを主力商品としていたため、明治時代を通じて根強く残ったと論じている。そして、文明開化による新技術の一斉導入という従来の見方を相対化し、地域的な偏差への着目の重要性を示唆している。

たちはイデオロギーをめぐる観念的な攘夷へと傾斜していったことを論じる。水戸学のこうした排耶論は、一八六〇年代にはすでに維新の志士たちに放棄されてしまいが、その意識は仏教者として排耶を唱えるものたちによって受け継がれていったことを明らかにする。

ストーン論文は、幕末の著名な日蓮宗の在家居士である小川泰堂を取り上げ、幕末維新期において在家活動家がどのように行動したのかを論じている。泰堂は文献批判を踏まえた「高祖遺文録」の編纂と、長く人気を博した日蓮伝・「日蓮大真実伝」という二つの本を著し、在家信者による法華信仰を盛り上げ、精力的な折伏の促進、王法と仏法の合体一致を説く「建議書」の提出など、政治参加を伴う社会的活動をおこなった。そしてこの精力的な日蓮主義運動は、泰堂の孫娘の夫にあたる田中智学に受け継がれ、近代日蓮主義運動に発展したと述べている。

グリーン論文は、幕末維新期の伊勢神宮に注目し、外宮と内宮の聖なる空間と古市遊郭を中心とする俗なる世間から成り立っていた近世の伊勢が、明治維新によって「天皇の大廟」である伊勢神宮をもつにふさわしい町に変貌を遂げたことを明らかにする。明治維新を経て、全国から旅行者が集う伊勢という町の主役は、参拝者・御師のような多様な神職・茶汲み女という人々から、国家官僚・神宮の神職、宇治山田の企業家に交代する。そして、伊勢の町が後者を中心とする人々によって、近代皇室祭礼のための「神都」に作り替えられていった過程を論じている。

谷川論文は、須弥山説に即して天体の航行を説明し、暦の作成に役立てようとした仏教天文学（梵曆）が、幕末から維新にかけてどのように論じられたのかを、佐田介石という天文学僧に着目して明らかにしている。文明開化の立場から、政府が須弥山儀を用いた説教を禁じた状況にあって、介石は幕末の先学にならって盛んに仏教天文学の講義を行い、幅広い人々を魅了した。しかし、最終的には西洋拒絶の頑固者とみなされるようになり、その死後仏教天文学は顧みられることはなくなったと述べている。

林論文は、明治初年に政府がおこなった上知令の行政裁判訴訟問題が取り上げられ、これに当時の学者たちがどのように向き合ったのかを論じた。上知令の行政裁判訴訟問題は、帝国大学の学者たちを巻き込み、とくに朱印状は所有権の付与を意味するかが争われた。所有権の付与については、国史学者の辻善之助、三上参次、芝葛盛が肯定派、法制史家の中田薫が否定派に立って激しい論争が繰り広げられたが、次第に中田の否定説が広く受け入れられるようになる。近世の朱印状の文言の解釈をめぐる争われていた論争であったが、最終的には法律

的な見方が優位になったと結論づける。

このように一二人（+コラムを入れれば九名）の論文によって幕末維新期の宗教が論じられているのであるが、論文と論文の間に挿入されるコラムも、短いながら非常に魅力的な論考が揃っている。紙幅の関係ですべてを紹介することはできないのであるが、「京坂「切支丹」一件」（松金）で論じられた、社会的異端者としての「切支丹」（キリスト教的信仰）と、その

取り締まり及び仏教団の隠れキリシタンへの畏怖の増幅は、多くの読者の「切支丹」像を見直すきっかけとなるコラムであるだろうし、「孔子の変貌」(桐原)もまた、維新以降における儒学の退潮と、漢学による専門分化、国民道徳論による聖性の喪失と偉人孔子登場の過程は、儒学/漢学から維新以降の日本思想史をみる試みとして非常に読み応えがあった。ほかにも面白いコラムはいくつもあるもので、本当にここで紹介できないのが惜しいと言わざるを得ない。

これより本書の評価すべき点に言及したい。なお評価(および疑問点)に関しては個別の論文に立ち入るよりは、本書全体の問題意識に照らし合わせて論じることとする。まず本書の成果であるが、あとがきにも記されているように、「幕末維新期の叙述を通して学問的断絶のみられる近世と近代を架橋させることを目的とし、宗教学・仏教学・思想史学・歴史学・社会学・日本学など、さまざまな専攻の研究者に、既存の時代区分を相対化した立場から、最新の成果や独自の観点を盛り込み、「一九世紀日本の宗教におけるあらたな一面を描き出す」ことに成功している(三八〇頁)。特に近年研究が著しい近代仏教研究の成果を、幕末期から維新期における当時の宗教世界に置きなおした場合、仏教そのものの動きだけでなく、儒学や攘夷思想、排耶論とどうかわるのかが明らかにになった点は、本書の重要な読みどころであるし、共同研究の一大成果であるといえるであろう。

また、従来の仏教史で説かれていた法難史観や、民衆宗教研究で唱えられていた民衆の抵抗の主体の形成という視点を相対

だろうか(最新の研究成果としては、藤田大誠編『国家神道と国体論』弘文堂、二〇一九年などがある)。

第二に、これは第一の点とも関連するが、幕末から維新の宗教世界が天皇制とどう向きあったのかについて、触れるべきであったのではないだろうか。本書が近世と近代の断絶面ではなく、接統面に光を当てた点は評価されるべきである。しかし、近代において近世以上に存在感を増す天皇制が、どのように幕末維新期の宗教世界に影響を与えたのか、あるいはその逆に、近代の天皇制というものが近世的な宗教世界にどの程度拘束されたのかという問題意識については、一部の論考を除けば全体的に関心が希薄な印象を受ける。そのためか、維新一五〇年にかこつけた内容であるにも関わらず、近代化論批判が展開されるばかりで、その維新以降、近代化と同時に進化したはずの天皇制の全面化がほとんど議論の対象にされない。この点は、仏教史研究の関心にやや引き寄せられすぎで、隔靴搔痒の感がある。

もちろん本書の意図が政治領域において強調される断絶論から距離をとり、非政治的領域における幕末からの連続性に焦点を当てることにあるのは十分に理解している。しかし、政治と文化は本来お互いに影響しあっている問題でもある。幕末期の宗教世界の多様性や、維新期における近世的な宗教観の残存状況に光を当てたという点で、本書は評価されるべきであるが、その研究結果をもっと一度、従来の「国家神道」研究、近代神道研究や天皇制研究に問いかける余地はあったのではないだろうか。無論それ自体は、むしろ評者を含む近代の維新期以

化し、実際の史料に即して幕末維新期の宗教世界に迫ろうとする姿勢は意欲的で好感が持てる。さらに、キリシタン、キリスト教が幕末維新期の宗教世界に「他者」として表象され、実態との乖離を含みつつ、仏教や後期水戸学に多大な影響を与えていたという点も非常に面白い。

さらに、本書で岩田が触れていたような月性と儒学ネットワークは興味深い発見であるが、この時期には国学者のネットワークも機能していた(宮地正人「歴史のなかの「夜明け前」」吉川弘文館、二〇一五年)。そうした国学のネットワークと儒学のネットワークがどのように絡み合うのか、今後の研究での展望が待たれる点である。

しかしながら、そのなかでも気になった点はいくつかある。その内容は大きく分けて三つである。第一に、神社神道や国学に関する記述が少ないという点があげられる。近代仏教の研究がすすむ傍ら、近代神道の研究も近年大きな成果を上げている。カミとホトケの幕末維新を解明する一方で、近代神道の研究とどう重なりあうことができるのかの言及がほとんどなかったのは、少し残念な点である。本書の意図は、従来縦割りで論じられてきた宗教世界をそれぞれ交錯させて分析することにあつたはずである。だが、幕末維新期の仏教の見直しは盛んに取り上げられる一方、神道はほとんど触れられないままとなっている。もともと近代仏教研究の研究会から発展したので、仏教が中心になるのは当然であろうが、幕末維新期の宗教世界の見直しを主題に掲げるならば、改めてこの研究が近代神道の研究状況とどうかわるかの展望が示されてもよかつたのではない

降の時代を主な領域としているものこそが、自身の研究領域で引き受けなければならない問題なのであるが、幕末維新期の宗教の世界観がどう近代の天皇制や「国家神道」に接統するのか、その展望があれば、本書はさらに面白い論文集になっていたであろう。

第三に、これは第一部の内容とも重なるが、幕末維新期とくに維新期の民衆宗教の実態分析が、ほとんど行われていないという点である。たしかに認識枠組みの転換も大事であるし、その点は本書の大いに評価できる点である。しかし、その転換した枠組みから、どのようにその多様な実態の分析を打ち出すことができるのか。従来の民衆宗教(新宗教)研究が、研究者の問題関心に大きく規定されたものであるとするならば、それを引き受けつつ筆者らは何を代わりに示そうとしているのかは、もっと強調されるべきだったのではないだろうか。おそらくこれは今後の課題であろうと思うので、これからの展開に期待したいところである。

限られた紙幅のなかで、充実した内容を持つ本書のすべてを語りつくすことは困難であるため、いくつ論点を絞って論じざるを得ない。そのため、評者の言葉足らずな部分があるのではないかと恐れる次第であるが、その点は何卒ご海容を乞う次第である。何よりもこれだけ充実した内容であるにもかかわらず、本書は値段も求めやすい価格帯となっているので、幕末維新期の宗教に少しでも興味関心のある方々は、ぜひ手に取って読んでいただきたい。本書の知見が広く参照されることを期待する。

青野正明著

『植民地朝鮮の民族宗教』

——国家神道体制下の「類似宗教」論——

法蔵館 二〇一八年一月刊
A5判 vii+三二〇頁 三八〇〇円+税

佐々 充 昭

一 本書の概要

朝鮮王朝の支配体制が大きく揺らぎ始めた一九世紀後半以降、朝鮮では既成宗教とは異なる、朝鮮独自の新宗教が発生した。これらの新宗教は、朝鮮土着の民間信仰の伝統を基盤としたものであり、日本の幕末・明治期に登場した天理教・金光教・大本などの新宗教とその性質が類似している。日本では「民衆宗教」という呼び方が一般化しているが、韓国の宗教学界ではこれらの新宗教を「民族宗教」と称している。

本書の著者である青野氏は、二〇〇一年に『朝鮮農村の民族宗教——植民地期の天道教・金剛大道を中心に』（社会評論社）を刊行し、朝鮮の代表的な民族宗教である天道教（東学が一九〇五年に改称したもの）と金剛大道を対象とする研究を行った。日本における植民地朝鮮の宗教研究は、朝鮮独自の精神世界を取り扱うものであるために、ある種の政治的ナイーブさが伴い、歴史研究に比べて立ち遅れていた。そんな中において本書は、朝鮮発祥の民族宗教について日本で本格的に扱った専門

書として画期的なものであった。今回刊行された著書は、この単行本の内容を大幅に改訂したものである。

また本書に先立って、青野氏は『帝国神道の形成——植民地朝鮮と国家神道の論理』（岩波書店、二〇一五年）を刊行している。そこでは「帝国神道」という新たな概念を用いて、植民地朝鮮で展開された「神社神道」「国家神道」の在り方について論じている。近代日本が国民国家を拡張させる過程において帝国化し、帝国内に内包された多数の民族を包摂・統合するために「国家神道」が「帝国神道」として再編された、というのがその主張の骨子である。このような「帝国神道」論を踏まえた上で、「朝鮮の民族宗教を帝国史の中で相対化し、その特質を普遍性をもたせて評価する」（本書、三頁）という意図のもとに、その内容を大幅に書き直したものが本書である。

二 本書の要約

本書の目次を記すと以下の通りである（紙幅の制約のために節の下に設けられた項目は省略する）。

序章 国家神道体制と民族宗教・「類似宗教」

一 植民地朝鮮の民族宗教とは

二 国家神道体制の朝鮮への移植

三 「類似宗教」概念とは

四 朝鮮の終末思想

五 本書の構成

あとがき

冒頭の序章において、本書で設定された課題・研究視点・研究方法・構成について記されている。それを参照しながら、各章ごとの内容を要約してみよう。

まず第一章では、民族宗教の基盤となった農村の社会的共同性について検討されている。朝鮮の農村では、契（朝鮮土着の相互扶助組織、日本の頼母子講に似たもの）によって支えられたトウレという固有の作業共同体による自治が行われていた。

しかし、日本の植民統治が始まると、伝統的な村落自治が解体され、自作農の没落と流民化が起こった。このような危機的状況に対応するために、一九二〇年代頃から多くの契が主体的に組合組織へと編成替えしていった。これに関して本書では、北部地方における畑作地帯と南部地方における水田地帯において、共同性の紐帯に強弱の差があった点に着目している。すなわち、北部の畑作地帯では、両班支配層の勢力が弱く共同性も弱かったために、契による新たな自治組織が再編されやすかった。これに対して、南部水田地帯では、在地両班層による支配が強く共同性が強固に維持されたために自治組織化が容易ではなかった。このような社会的な基盤の違いは、一九一九年の三・一運動を契機として勃興した民族主義の流れの中で、農村社会に深く根付いていた巫俗（朝鮮土着のシャーマニズム）や終末思想（弥勒下生信仰や『鄭鑑録』信仰など）の再編のされ方の違いとして、異なるタイプの民族宗教の土台となっていた。この異なるタイプの民族宗教に関する具体的な考察は、第

第一章 農村における民族宗教の基盤

第一節 農村での巫俗の変容

第二節 農村での契の自治的再編

第二章 朝鮮総督府の「迷信」概念と巫俗信仰

第一節 三・一運動後の調査事業

第二節 調査資料『朝鮮の巫覡』

第三節 「巫子取締法規」の到達点

第三章 朝鮮総督府の「類似宗教」概念と終末思想

第一節 「類似宗教」概念の形成

第二節 調査資料『朝鮮の類似宗教』

第三節 「類似宗教」の「解散」「改宗」

第四章 天道教の「地上天国」建設

第一節 朝鮮農民社の「郷村自営論」

第二節 「郷村自営」運動の実態

第三節 農民にとっての「郷村自営」

第四節 農村振興運動による受難

第五章 金剛大道の予言の地

第一節 金剛大道の信徒村

第二節 受難の予兆

第三節 信徒村の受難

終章 普遍性のある民族宗教論を目指して

一 民族宗教運動の二類型

二 論点の整理

三 「改宗」協力の内実

巻末付録 金剛大道提供の写真

四章と第五章で展開されている。

次に第二章では、民族宗教の基盤をなす村落社会に対して、朝鮮総督府がどのような認識をもっていたのかについて検討されている。併合後、朝鮮総督府は旧慣制度調査事業という形で、朝鮮民衆の日常生活に初めて本格的に足を踏み入れた。しかし、それは総督府の意向に沿わない朝鮮人の日常的慣習に「迷信」というレッテルを付与しながら、警察犯処罰規則による取り締まりを行うのが目的であった。その後、三・一運動に大きな衝撃を受けた総督府側は、朝鮮人の内面性により踏み込む必要性を感じ、「朝鮮社会事情調査」と「部落調査」という行政上の調査を行った。とりわけ朝鮮総督府の囑託として村山智順が行った民間信仰調査は、『朝鮮の鬼神』（一九二九年）、『朝鮮の風水』（一九三一年）、『朝鮮の巫覡』（一九三二年）、『朝鮮の占トと予言』（一九三三年）としてまとめられた。本書では、村山が行った調査に対して一定の資料的価値を有するものとしながらも、その調査方法と政策意図を十分に考慮しなければならぬとして、総督府による統治政策との関連から村山智順の思想的背景を析出しながら綿密な資料批判・分析を行っている。

第三章では、併合前の統監府および併合後の朝鮮総督府が制定した宗教関連法令を整理しながら、「類似宗教」概念の形成と変遷の過程について詳細な検討が行われている。とりわけ一九一五年に制定された布教規則では、神道（教派神道）・仏教・キリスト教のみが公認宗教とされ、それ以外の宗教団体は非公認宗教として警察当局の取り締まり対象とされた。またそ

の中で、結社としての存在が許可された団体は「宗教類似ノ団体」とされて同規則が準用されたのに対して、「宗教類似ノ団体」とさえも認定されなかった団体は同規則の適用対象外として秘密結社化するしかなかった。この措置に対して、本書では「宗教類似ノ団体」が宗教行政の所管に取り込む「懐柔」に位置し、存在を許されない秘密結社は「取り締まり」に位置していたと論じている。さらに本書では、村山が行った「朝鮮の類似宗教」（一九三五年）を参照しながら、朝鮮の民族宗教が「邪教」として取り締まりを受けて解散に追い込まれていった過程について、白教事件（一九三七年）を含む多数の事例をもとに分析している。また、それらの民族宗教教団の中には真宗大谷派へ改宗した水雲教など、日本仏教へ偽装改宗した教団もあったことが述べられている。

第四章では、天道教青年党が担った朝鮮農民社（一九二五年創立）について検討がなされている。本書によると、朝鮮の民族宗教は「両面性」を持つとされる。すなわち、私的領域で日常では巫俗的要素が多く見出される一方で、「植民地支配に抵抗したり独立を目指して公的領域に浮上しようとする時、その作用には終末思想が大きく働いて、それが受け皿となり近代的な民族主義的ナショナリズムへと発展していく」（本書、一九七頁）とされる。そして、民族宗教が公的領域に浮上した事例をもとに民族宗教の類型を、①「地上天国」建設型と、②予言の地型の二つに分類する。この二類型は、南北の地域差に起因するものでもある（本書、一九七頁）。このような観点から、本章では、北部地域を中心とする「地上天国」建設型の民族宗

教運動として、天道教青年党が担った朝鮮農民社について検討がなされている。一九一九年の三・一運動を通じて民族主義的ナショナリズムが朝鮮人の間で形成され始めた。しかし、三・一運動を主導した天道教とキリスト教プロテスタントは同運動が弾圧される過程で組織的な打撃を被り、民衆を引き付ける魅力を失った。そのために民衆の終末思想がこれら宗教運動の精神的求心点となっていた。特に天道教は、一八六〇年に崔済愚によって創教された東学を前身とするものであり、「後天開闢」の世を告げる終末思想を基本教理としていた。天道教は一九二二年から二七年の間に新旧派から四派に分裂したが、天道教新派である天道教青年党（一九二三年に創設）でもこのような「後天開闢」思想をもとに「地上天国建設」（天道教青年党憲）が謳われた。本章では、天道教青年党およびその傘下の朝鮮農民社の運動が北部畑作地帯で展開された農村自治運動であり、終末論的な「地上天国」という理想を「村落自治」へ実体化することを目指した運動であると捉え、それが一九三〇年代から開始された総督府の農村振興運動によって挫折させられていく過程が詳細に論じられている。

続く第五章では、②予言の地型を対象として、南部地域における民族宗教の特質について検討されている。南部の水田地帯の場合、村落の共同性が比較的強い地域である故に、契組による自治再編が困難であった。そのために、村落自治への結束力として「予言の地」という言説や強いカリスマ的存在が必要とされた。その際、大きな役割を果たしたのが、朝鮮王朝時代後期から流布していた『鄭鑑録』という識緯書である。

『鄭鑑録』では、天変地異と変乱によって李氏朝鮮王朝が滅亡した後、鄭氏を姓とする超人（「真人」）が現れて新たな王朝が鶏龍山（忠清南道にある標高八二八メートルの山）に建てられると予言されている。『鄭鑑録』に記された終末思想は、崔済愚が創始した東学（天道教）や姜嶺山が創始した嶺山系教団に大きな影響を与えた。日本の植民地時代に入っても、『鄭鑑録』に対する信仰は収束するどころかむしろ全盛を見せ、特に三・一運動が挫折した後、宗教的なユートピアを求めて鶏龍山に各種の宗教団体が群棲するようにさえた。本章では、『鄭鑑録』の影響を受けて予言の地である鶏龍山に信徒村を形成した教団として金剛大道の事例について考察している。まず金剛大道が信徒村を形成する経緯について、次に総督府による満洲移民や改宗のための懐柔工作などについて、さらには大量検挙による教団弾圧と信徒村からの強制退去といった受難の歴史が、現地調査で入手された教団資料や信徒からのインタビューを通じて克明に描かれている。そして、金剛大道が信徒村から強制退去させられた後に信徒たちの心をつなぎ止める役割を果たしたのが、信徒村解体の危機に直面した時に生み出された「歌舞（興氣道徳歌など）」であったと論じられている（本書、二七九頁）。

終章は「普遍性のある民族宗教論を目指して」と題して、第一章から第五章までの内容を整理しながら、あらためて①「国家神道」体制という枠組みの問題、②朝鮮農民社の「郷村自営」運動の評価に関する問題、③土着文化としての終末思想の根強さについて指摘している。そして本書を締めくくるに当た

って、真宗大谷派による「改宗」協力の実態について考察されている。これに関しては、先行研究によって朝鮮総督府による秘密結社取り締まりの一環で解散に追い込まれた民族宗教の包摂に大谷派が協力したことが指摘されていた。これに対して、本書では、現地の布教所や関連施設の僧侶たちは、大谷派の開教監督部と、偽装改宗をしたり布教所を隠れ蓑にしていたりした朝鮮人たちとの狭間で板挟み状態に置かれ、朝鮮人たちの側に近づくようにしていた可能性があることが論じられている（本書、二九六頁）。

三 評者によるコメント

以上に述べたように、本書は、朝鮮総督府の宗教政策や行政調査の内容を詳細に分析しつつ、各種の教団関連資料を精査しながら朝鮮民族宗教の特質を析出しようとした非常に実証的な研究書である。ここでは、各章で行われた事例研究の内容を個々に論じる紙幅の余裕はないので、評者の関心分野に引き付けて、本書の前提となる「民族宗教」という概念全般に関する問題提起を行いたい。

まず青野氏は、本書において「民族宗教」とは、「韓民族の単一運命共同体意識が含まれた宗教概念」であり、それらの共通点として「①韓国の自生宗教、②民族共同体意識、③民族固有精神の啓発を企図、④苦難から解放された民族の栄光の約束」があげられると述べている（本書、一九頁）。この定義は、アン・フサン「普天教と物産奨励運動」（『韓国民族運動と宗教』国学資料院、一九九八年）の脚注を引用したものである

（本書、一九頁）。しかし、韓国の学界で「民族宗教」という用語を初めて提唱したのは、当時、ソウル大学宗教学科の教授で韓国宗教学会会長であった尹以欽であった。尹以欽は一九八五年六月に「民族宗教育成方案」（『政策研究』国際問題研究所、尹以欽「韓国宗教研究」第一巻、集文堂、一九八六年に収録）という論文を発表して、韓国独自の学術概念として「民族宗教」という用語の使用を提唱し、一連の「民族宗教」育成運動を展開していった。青野氏が引用したアン・フサンの定義は、尹以欽が提唱した定義をそのまま採用したものである。尹以欽を中心とする「民族宗教」概念の普及と育成運動は、「漢江の奇跡」と呼ばれた驚異的な経済成長を背景に一九八〇年代の韓国社会に蔓延したナショナリズム（民族主義）の風潮に便乗しながら、それまで劣勢を強いられていた新宗教教団の勢力巻き返しを図ろうとした、多分に政治的かつ戦略的な学術運動であった（これに関しては、拙著「植民地朝鮮における檀君教の沿革と活動」『朝鮮史研究会論文集』第四一集、二〇〇三年を参照）。「民族宗教」という用語の学術的な定義を論じる際に、以上にあげた問題（「民族宗教」という用語自体に一九八〇年代の韓国民族主義が投影されているという問題）について何らかの言及があった方がいいのではないだろうか。

これと関連して、民族宗教の類型化に関する問題も指摘したい。現在、韓国では民族宗教を、檀君系（大倣教など）、東学（天道教系・甌山教系・円仏教・儒教系・更定儒道など）に分類するのが一般的である。ちなみに、村山智順「朝鮮の類似宗教」（一九三五年）でも、東学系・呼吟系（甌山教系を指す）・

仏教系（円仏教の前身である仏教研究会が含まれる）、崇神系（檀君教・大倣教が含まれる）、儒教系（孔子教などが含まれる）に分類している。これに対して本書では、東学（天道教）系教団と金剛大道を主にとりあげているのみで、他の民族宗教教団に関する言及が著しく少ない（序章の脚注に若干の言及があるだけである）。確かに、東学（天道教）系教団は植民地朝鮮を代表する民族宗教として、信徒数や政治的影響力の上で最も勢力を有した教団であった。しかし、限られた宗教教団だけをもってして、朝鮮の民族宗教の類型を、①「地上天国」建設型と、②予言の地型という二つだけに限定してよいものだろうか。少なくとも、「帝国神道」との対峙・対抗関係から「類似宗教」と規定された朝鮮民族宗教の特質を論じるという本書の目的を考慮するならば、他の民族宗教教団に関するより詳しい言及が必要ではないだろうか。なお、青野氏が本書で提示している「地上天国」建設型と予言の地型という類型（タイプ）は、韓国の宗教学界において「後天開闢」型として同列に扱われているものである。「地上天国」という用語に関しては、そもそも予言の地型の宗教にも地上天国的な要素があるので、用語として適切かどうかという問題がある。新たに試みた類型化をより説得力のあるものとするためにも、既存の学界で定説となっている「後天開闢」型との関連性や違いについての言及が欲しかった。

また、それと関連して、用語の問題についても指摘したい。本書では、（上の要約で述べた通り）朝鮮の民族宗教が担った特質として「民族主義的ナショナリズム」という用語が頻出す

るが（例えば序章三頁）、これは同語反復であり、読者を混乱させる。青野氏の主張を要約すると、近代日本が帝国主義的影響をする過程で「単一民族主義」から「多民族帝国主義的ナショナリズム」へと移行し、それとともに「国家神道」が「帝国神道」へと再編された。そして、「帝国神道」による「多民族帝国主義的ナショナリズム」に対峙するために、朝鮮の民族宗教が「民族主義的ナショナリズム」を担ったとされる（本書、四頁）。このことから青野氏の言う「民族主義的ナショナリズム」とは、通常の学術用語でいう「エスノ・ナショナリズム（ethnonationalism）」と解釈できるが、そのように理解してよいのだろうか。同様に「多民族帝国主義的ナショナリズム」という用語も曖昧であり、明確な定義が必要であろう。「民族主義／ナショナリズム」に関しては、歴史学・社会学の分野において、「国民国家」論・「帝国」論に加えて、最近では「植民地近代（性）」論などの議論がなされている。序章の段階において、「民族主義／ナショナリズム」の概念に関するより精緻な理論的考察があれば、後に続く本論の考察内容がより理解しやすくなったと思われる。

以上、評者の立場から疑問に思った点について述べた。上に指摘した問題点は、本書で設定された問題意識からは逸脱したものであるかもしれないが、（青野氏自身が最終章で述べているように）本書が達成した研究成果を土台に、より普遍的な議論へと広げるための問題提起として理解してもらえたとありがたい。

本書では、朝鮮総督府の宗教政策や行政文書などを実証的に

丹念に読み込み、なおかつ従来の研究にはない、新たな分析枠組みを提示しているという点でその学術的価値は高い。また、特に金剛大道に関して現地でのフィールドワークを行い、新たな資料を発掘して信者の貴重な証言を得ている点も高く評価できる。日本の研究者が植民地朝鮮の歴史、しかも日本側がかつて弾圧し邪教視した新宗教教団に対して現地調査を行うためには、教団関係者との信頼関係が必要不可欠である。このような信頼関係を構築し得たという点は本書の研究がいかに貴重であるかを物語っている。

いま日韓関係は戦後最悪の状況を迎えている。「民族宗教をテーマとする実証研究の方法論としては、総督府資料と教団資料の照合に加えて、資料的には困難ではあるが現地における人々の実態にも迫りながら、支配・被支配という二項対立の次元を超えた分析が必要である。このような方法論が未来につながる研究を生むことになる」（本書、二九五頁）。青野氏のこの提言に評者も全面的に賛同し、本書がこの課題を達成した重要な業績であることを述べて、この書評を閉じたい。